

「儒教とピューリタニズム」における脱呪術化概念

千葉 芳 夫

〔抄 録〕

ヴェーバーの「脱呪術化」の概念は、多くの場合、知による予測と支配、つまり「主知主義的合理化」の意味で捉えられているが、宗教社会学においては、これとは異なった意味で用いられている。「儒教とピューリタニズム」においては、それは「倫理化」と並ぶ宗教の合理化の程度を示す規準の一つとされ、さらに救済の手段としての呪術を排するという意味と、「脱伝統化」=「現世の合理的改造」という二つの意味で用いられている。

だが、脱伝統化は脱呪術化によってではなく、倫理化のある方向によって引き起こされると考えなければならない。宗教の脱呪術化は、現世の合理化としてではなく、宗教が呪術から脱却すること、と解さねばならないのである。

キーワード ヴェーバー、現世の合理化、儒教とピューリタニズム、人格、脱呪術化

序

ヴェーバーは「職業としての学問」において「脱呪術化 (Entzauberung)」を「主知主義的合理化 (intellektualistische Rationalisierung)」と同義だとしている。「それを欲しさえすれば、どんなことでもつねに学び知ることができるということ、したがってそこにはなにか神秘的な、予測しえない力がはたらいている道理がないということ、むしろすべてのことがらは原則上予測によって意のままになるということ、このことを知っている、あるいは信じているというのが、主知化した合理化しているということの意味なのである」(S.536, 33)。つまり、予測による支配(を信じていること)が「主知主義的合理化」のそして「脱呪術化」の意味だということになる。予測による支配は、ベーコン以来の近代科学の目標でもあった。

「脱呪術化」あるいは最近では「再魔術化」について論じる多くの論者は「脱呪術化」をこの意味で理解している⁽¹⁾。だが、ヴェーバーの宗教社会学においては、この概念は「主知主義的合理化」とは異なった意味で用いられている。このことは、よく知られている「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(以下では「倫理論文」と呼ぶ)の個所を見るだけで

も理解出来よう。

そこでヴェーバーはカルヴィニズムについて次のように述べている。「世界の脱呪術化という宗教史上のあの偉大な過程、すなわち、古代ユダヤの預言者とともににはじまり、ギリシャの科学的思考と結合しつつ、救いのためのあらゆる呪術的方法を迷信とし邪悪として排斥したあの脱呪術化の過程はここに完結をみたのだった」（SS.94-95, 157）。人間にはうかがい知ることも、変更することもできない、隠れた神の預定を信じるカルヴィニストの思考を「主知主義的合理化の完結」と見なすことはできないであろう。

宗教社会学においてヴェーバーは、「脱呪術化」を「主知主義的合理化」とは明らかに異なる意味で用いているのである。本稿では「儒教と道教」の最終章、「儒教とピューリタニズム」における脱呪術化概念の検討を通して、ヴェーバーが宗教と脱呪術化との関係をどのように考えていたのかを考察する。

1. 宗教の合理化の一つの規準としての脱呪術化

「儒教とピューリタニズム」の中で、ヴェーバーは宗教の合理化を判別する規準として、次の二つをあげている。一つは「宗教がどこまで呪術を払拭しているか、その程度」、つまり脱呪術化の程度であり、もう一つはその宗教における「神と現世との関係」、「現世にたいする固有な倫理的関係がどこまで組織的に統一されたものとなっているか」の程度である（S.512, 167）。

金井はこれを「脱呪術化・倫理化」テーゼと呼び、宗教における合理化プロセスの内容を示すものとしている（157）。こうした捉え方は、西洋における宗教の合理化を考察するにあいには有効であろう。だがこの論考では、むしろ「脱呪術化」が「倫理化」と区別される、宗教の合理化の「一つの」規準であることに注目したい。それは、いくつかのことを意味することになる。

まず、「脱呪術化」と「合理化」が同義ではない、ということである。「儒教とピューリタニズム」で繰り返し述べられているのは、儒教は脱呪術化してはいないが、しかしながら、合理的な宗教だ、ということである。つまり、合理化にはいくつかの（宗教においては二つの）規準があり、脱呪術化はその一つに過ぎない、ということになる。これは「脱呪術化」が「主知主義的合理化」と同義だとする科学論の文脈での意味合いとは異なっている。

また、ここでの「脱呪術化」は「主知主義的合理化」とは明らかに異なった意味をもっている。それは、主知主義（科学的思考）によっては否定されるしかない宗教を信じているという一般的な意味だけではない。「儒教と道教」において、ヴェーバーは「儒教はユダヤ人やキリスト教徒やピューリタンと同様に呪術の実在性を疑わなかったのだ（ニューイングランドにおいても魔女が焚き殺されたことがある）」（S.443-444, 260）と述べている。これは、ピュー

リタンも呪術的思考や呪術の世界から完全に抜け出していた訳ではない、ということの意味している⁽²⁾。繰り返しになるが、宗教社会学における「脱呪術化」は、「主知主義的合理化」とは明らかに異なった意味で用いられているのである。

では、「儒教とピューリタニズム」において「脱呪術化」はどのような意味を持つのであろうか。「儒教のばあいには、呪術は現実には救済をもたらすものと考えて放置されたのに対して、ピューリタニズムのばあいには、およそ呪術的なものはすべて悪魔的と考えられ」た (S.513, 168)。「倫理論文」の表現を用いるなら、「救いのためのあらゆる呪術的方法を……排斥」することが、まず「脱呪術化」の意味だ、ということになるであろう⁽³⁾。

だが、「儒教とピューリタニズム」においては、「脱呪術化」は別の意味でも用いられている。ヴェーバーは「呪術から帰結するものは伝統の不可侵という事実であった」と述べている (S.527, 192)。「およそ自然と神性、倫理的要請と人間的不完全、罪の意識と救いの要求、現世での行為と来世での応報、宗教的義務と政治的・社会的現実、そういったもののあいだの緊張関係は儒教倫理では完全に欠如しており、したがって、伝統や習慣に束縛されつつも、それを超える、そうした内面の力によって生活を支配するための手がかりなどは求むべくもなかった」 (S.522, 183)。「儒教と道教」の言葉を用いるなら、「儒教全体は、伝統的なものを徹底的に神格化 (Kanonisierung) することとなった」のである (S.452, 273)。呪術が伝統維持と結びつけられるのならば、脱呪術化は脱伝統化を意味することになる。

宗教社会学において、「世俗内」「世俗外」、「瞑想」「禁欲」といった特徴によって世界宗教を類型化しつつヴェーバーが強調しているのは、ピューリタニズムの「世俗内禁欲」だけが現世を合理的に改造しえたということに他ならない。「儒教における現世への順応とはおよそ対照的に、ピューリタニズムにおいては、現世の合理的改造 (rationale Umgestaltung) への使命が打ちたてられたのである」 (S.527, 192)。これに対して、「現世肯定」として特徴づけられる儒教は、「奥深いところに『呪術の園 (Zaubergarten)』を存続させる傾向」 (S.513, 169) を持ち、それ故、伝統主義を打破するどころか、それを尊重するのである。

このように、「儒教とピューリタニズム」では、「脱呪術化」は救済の手段としての呪術を排除することと、現世 (世俗) の合理的改造 = 脱伝統化という二つの意味で用いられている。では、この両者はどう関連しているのであろうか。

2. 脱呪術化と合理的生活態度

「倫理論文」において両者を媒介する位置に置かれているのは、「資本主義の精神」と名付けられた「合理的生活態度」であった。「儒教とピューリタニズム」においても、人格に関する議論がなされている。

儒教徒は、西欧において「人格 (Persönlichkeit)」という観念が意味する、「あの内側から

の統一」を獲得することができなかった。儒教徒の生活態度には、「内面的統一」が、つまり「『内面』(von innen heraus)から発する、自己の内部に態度決定の中心があり、それによって規制されるような統一が欠如している」(S.518, 177)。彼らに見られるのは「現世（世俗）の諸条件に対する、つまり外側への(nach außen hin)順応」なのである(S.521, 182)。「ところで、最もよく順応した人間、つまりひたすら生活における順応の必要にしたがって合理化された人間は、組織的な統一体ではなく、単に個々の功利主義的諸資質が一つに結び合わされたものにすぎない」(同所)。

儒教徒にも「自覚的な合理的自己制御(wache rationale Selbstkontrolle)」(S.514, 170)が見られはするが、それは「あらゆる面で完成された完全な現世人としての品位を維持する」(S.527, 192)ためであり、「あらゆる面で調和を保ち均斉のとれた人格に形成していくこと」(S.514, 170)が、彼らの理想であった。だが、「およそ現世を超え出ようとする意欲の欠けているところでは、現世に立ち向かっていく正味の力もおのずから不足せざるをえなかった」(S.521, 182)。

「あらゆる面で調和を保ち均斉のとれた人格」が「組織的な統一体」としての「人格」ではない、という言い方はいささか分かりにくい、ヴェーバーの言いたいことは、前者からは現世を否定し、それを合理的に改造しようとする方向は生まれてこない、ということである。

これに対してピューリタニズムでは、「伝統の絶対的な非神聖視と、そして、所与の世界を支配し統御しつつ、これを倫理的に合理化しようとする不断の勤労への絶対無際限な使命、要するに、『進歩』への合理的な即事象的態度(die rationale Sachlichkeit)」が生まれ、「現世の合理的改造への使命が打ちたてられたのである」(S.527, 192)。

ピューリタニズムの特徴は、「禁欲的な現世拒否」の態度であり、これは「現世を超越する神」と「被造物的墮落」の内にある人間、そして「罪の容器」としての現世、という宗教的世界観に由来する(S.525, 188)。彼らにとっては、「儒教的な意味における自己完成(Selbstvervollkommnung)なるものは被造物を神化し、神を瀆する理想と考えられた」(同所)。預定信仰の下では、こうした観念が人間を「神の道具(Gottes Werkzeug)」と見なす考えに結びついていく、ということは「倫理論文」において詳論されていることである。およそ「人間的なもの」を大事にすることは被造物神化の罪と考えられ、ピューリタン達の行動は事象的な労働に向けられ、それが現世の合理的改造へと向かわせたのである。呪術的なものは救済の手段にはならず、ただ、神の命に従い禁欲的に職業労働に打ち込むことだけが、救済(に預定されていること)の証しとなる。

これに対して儒教においては、およそこの世界は秩序ある世界と捉えられている。つまり、「宗教的無価値化の点でも、実践的拒否の点でも、現世に対する緊張関係がおよそ最小限度にまで縮小」(S.514, 169)しているのである。人間がそもそも罪深いものなのか、現世が「罪の容器」である、といった考えは彼らには受け入れがたいものである。また、先に述べたよう

に、人間の理想も「あらゆる面で調和を保ち均斉のとれた人格」への自己完成であった。彼らにとって、「『品位ある人間』すなわち君子は決して道具ではな」く（君子不器）、「事象的な目的のための手段などではない」のである（S.532, 202）。

超越的な人格神への信仰によって統一的な人格が形成され、それが現世の伝統的秩序や慣習の決定的な否定に向かう、という論理は一応理解しうる。だが、儒教徒の生活態度も一内からの統一ではないにしろ「自覚的な合理的自己制御」が見られる限り、合理的生活態度と呼びうるのではないか。ヴェーバー自身、儒教徒の生活態度を「ピューリタン」とは方向が逆ではあるが「合理的と呼びうる」と述べている（S.534, 205）。ただ、その合理主義は「合理的な現世順応」を意味したのである。しかし、合理的主義が現世順応に向かうか、それとも現世改造に向かうかの違いは、脱呪術化しているかどうかによるのであろうか。

ヴェーバーは儒教が呪術をどう見ているかに関して、きわめて曖昧な論述をしている。一方では、先に引用したように「呪術は現実には救済をもたらすものと考えて放置された」と述べられているが、もう一方で、教養ある儒教徒は呪術に懐疑を懐きながらもそれを尊重したとされている（S.515, 172）。さらに「儒教と道教」ではより明確に「呪術は救済的意義をもたなかった。……儒教においては、……呪術は徳（Tugend）にたいしては無効だ、という命題が有効であった」（SS.443-444, 260）と述べられている。ヴェーバーはどうも、儒教徒が本気で呪術を信じていたとは考えていないように思われる。呪術を本気で信じていたのは中国の民衆に浸透していた道教であって、儒教は統治の必要から呪術を放置しておいたのである。

儒教は救済の手段として呪術を完全に排除はしなかったにせよ、それに懐疑を持つ程度には脱呪術化していたとも言いうる。だが、現世の合理的改造という意味での脱呪術化には向かわなかったのだ。ヴェーバーの議論はこう解するのが正しいであろう。

しかし、そうであれば、先に区別した二つの脱呪術化の関連はそれほど直接的なものではない、ということになる。両者は必然的に結びつくものではないのであって、救済の手段としての呪術を拒否しても、世俗外の生活・行為を重視するなら、現世の合理化には向かわないこともありうる。「倫理論文」で論じられているように、合理的・禁欲的な生活態度は、すでに西洋中世の修道院の中で完成されていた。だが、それが現世の合理化へと方向づけられるためには、カルヴァンの教えを待たねばならなかったのである。

3. 脱呪術化と脱伝統化

ヴェーバーはしばしば「伝統主義」を「合理主義」と対置している。「倫理論文」においては「資本主義の精神」の「闘争の敵」は、「伝統主義とも名付けるべき感覚と行動の様式」であったとされる（S.43, 63）。また、「伝統的行為」は「目的合理的行為」および「価値合理的行為」と対置されるし、「伝統的支配」は「合法的支配」と対置されている。ヴェーバーにお

いて、「合理主義」が「伝統主義」と対立し、それを打ち破るものと捉えられていることは明らかである。

「儒教とピューリタニズム」における「脱呪術化」の第二の意味、つまり脱伝統化を合理化の規準とすることは、ヴェーバーのこのような思考からすれば理解しうることではある。だが、脱伝統化＝現世の合理化は宗教の社会的作用である。ヴェーバーの関心が西欧独自の合理主義に向けられ、その一つの特徴として現世のくまなき合理化が挙げられていることは、よく知られていることである。また、合理化に対して宗教の果たした役割に彼が強い関心を抱いていたことも事実である。だが、現世を合理化することは、宗教の固有の役割だとは言えない。宗教の合理化と宗教による合理化は概念的に区別されなければならない。脱呪術化を脱伝統化＝「現世の合理的改造」と捉えそれを宗教の合理化の規準とすることは、宗教の合理化という論点の内に宗教による合理化の視点を密輸入していることになるのではないだろうか。そう言いうるとすれば、第二の意味での脱呪術化を宗教の合理化の規準とすることには、矛盾があると言わねばならない。

また、脱呪術化が脱伝統化を引き起こすのかどうかについても疑問の余地がある。ヴェーバーは一方では、「無条件の現世肯定・現世順応の倫理の内的な前提条件は、純呪術的な宗教(*rein magischer Religiosität*)が本来の姿のままで存続しているということであった」(S.515, 172)と述べている。だが、「民俗宗教のただ一つの……形式として、アニミズム的呪術がいつまでも存続したもの、およそ悪しき呪いを招き精霊の動揺を引き起こすような改革に対して人々の抱く伝統主義的な恐怖の結果であった」とも述べている (S.520, 179)。後者は呪術の存続が伝統主義的態度に起因するのだとも読める。

そもそも脱呪術化の過程はどう説明されるのであろうか。「儒教のばあいには、呪術は現実には救済をもたらすものと考えて放置されたのに対して、ピューリタニズムのばあいには、およそ呪術的なものはすべて悪魔的と考えられ、ただ合理的・倫理的なもののみが、すなわち神の誠命にしたがう行為、それも神によって潔められた心情から発するもののみが宗教的に価値あるものとされた」(S.513, 168)。これは、神と人間、神と現世の関係についてのある捉え方が、呪術を拒否する根拠だということを意味する。つまり、宗教の合理化の第二の規準とされている倫理化が脱呪術化に先立つということであり、倫理化のある方向が脱呪術化を引き起こすということに他ならない。とすれば、両者を独立した合理化の規準とみなすことはできない、ということになる。

ヴェーバーが脱呪術化を合理化の規準とするのは、伝統の否定、現世の合理化という点に関わっているからであろう。だが、この点についても同様のことが言えるのではないか。儒教が伝統を重視するのは、呪術を信じているからではなく、世界がそもそも秩序あるものだと考えているからである。儒教においては、「現世は考えるさまざまな世界のうちで最善のもの、人間の本性も素質からすれば倫理的に善であって、人間はこの世界において、すべてのことが

らにおけると同様、互いに程度こそ異なれ、原理的には質を同じくし、無限に完成にむかってすすむ能力と、道徳的律法を実行しうる力をもつものであった」(S.514, 169-170)。このような世界観からは、現世の秩序や伝統を根本的に否定しようとする方向は生まれるはずがない。

キリスト教においても、人間を罪深いものとし、およそ現世を倫理的に無価値なものと捉える世界観が脱呪術化の根底にあったと考える方がよいであろう。それに禁欲的に世俗の職業労働に打ち込むことこそが神の望むことだ、というピューリタニズムの観念が加わり、それが「現世の合理的改造」へと導いたのである。

つまり、脱呪術化が脱伝統化を引き起こすのではなく、ある方向性を持つ倫理化が脱呪術化と脱伝統化をもたらすのだ、ということである。また、「内面的統一」としての「人格」についても、「真正の預言」がそれをつくり出すのだ、と述べられている (S.521, 182)。そうであるならば、脱呪術化を倫理化とならぶ宗教の合理化の規準とすることは説得力を欠くことになる。脱呪術化が脱伝統化＝「現世の合理的改造」につながるのは、宗教の倫理化の一つの方向性に基づくのであって、それを独立した合理化の規準とみなすことはできないのである。

4. 呪術と伝統

さらに、呪術は常に伝統維持的な性格を持つであろうか。「中間考察」の中で、ヴェーバーは次のように述べている。「呪術は、カリスマ的資質を目覚めさせるためか、邪悪な魔術を防ぐために行われた」(S.540, 106)。そして、発展史的にみれば前者の方が重要であった、と。よく知られていることだが、ヴェーバーはカリスマを「内側からの革命」をもたらす力だとし、見なしていた。カリスマは彼の歴史観においては、歴史の変革をもたらす重要な要因とされている。呪術がカリスマの覚醒と結びつくとするれば、「儒教とピューリタニズム」における議論とは逆に、それは変革の方向性をもつものと考えねばならない。脱呪術化＝脱伝統化（現世の改造）という捉え方は、こうした見方と矛盾することになる。

以上から言えることは、ヴェーバー自身の他の個所での議論を参照すれば、呪術は伝統維持的に働く場合もあれば、伝統破壊的に作用することもある、と考えなければならない、ということである。とするならば、「儒教とピューリタニズム」のように、脱呪術化によって脱伝統化が引き起こされると論じることは、説得力を欠くと言わねばならない。

このように、脱伝統化という意味での脱呪術化を宗教の合理化の規準とすることは、現世の合理化という観点からみた場合にも疑問の余地があるものなのである。では、宗教社会学における脱呪術化概念は、意味のないものなのだろうか。そうとは言えない。「救いの手段として呪術を排する」というもう一つの意味においては、「脱呪術化」の概念は意味を持つと思われる。『岩波 哲学・思想事典』において中野は、呪術を「神強制」、宗教を「神奉仕」と捉え、

「神強制」から「神奉仕」への移行が、「『呪術』から『宗教』への移行であり、本来はこのプロセスが脱呪術化と呼ばれるものである」と解釈している（1034）⁽⁴⁾。

この解釈は、「儒教とピューリタニズム」ではなく、『経済と社会』の中の「宗教社会学」における論述に基づいているようである。そこでは「脱呪術化」という語は用いられていないが、文字通り呪術から抜け出し、宗教の原理が宗教の原理として確立される、ということこそ宗教の脱呪術化の意味だ、と考えた方が、ヴェーバーの他の議論と整合的であると思われる。だが、この点について詳論することは別の稿に委ねることにしたい。

〔注〕

- (1) 古くはホルクハイマー・アドルノの『啓蒙の弁証法』、最近ではリッツアの『消費社会の魔術的体系』を例に挙げることが出来る。
- (2) もっとも「儒教とピューリタニズム」ではそのすぐ前で、「ピューリタンのばあいにはのみ、現世の残るくまなき脱呪術化（die gänzliche Entzauberung der Welt）が徹底的に行われたとってよからう」と言われてはいるのだが（S.513, 168）。
- (3) 『社会学事典』における棚島による脱呪術化の説明はこの意味とはほぼ同じである（589）。
- (4) 武藤・蘭田・蘭田訳では、「神奉仕」ではなく「神礼拝」となっている。原語は Gottesdienst である。

〔引用・参考文献〕

- 廣松渉ほか（編）『岩波 哲学・思想事典』、岩波書店、1998 年。
- Horkheimer, M. & Adorno, T. W., *Dialektik der Aufklärung*, 1947. 徳永恂訳『啓蒙の弁証法』、岩波書店、1990 年。
- 金井新二『ウェーバーの宗教理論』、東京大学出版会、1991 年。
- 見田・栗原・田中（編）『社会学事典』、弘文堂、1988 年。
- Ritzer, G., *Enchanting a Disenchanted World*. 2nd. ed., Pine Forge Press, 2005. 山本徹夫・坂田恵美（訳）『消費社会の魔術的体系』、明石書店、2009 年。
- Weber, M., Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, in *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*. I., J. C. B. Mohr, 1920. 大塚久雄（訳）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、岩波書店、1989 年。
- Weber, M., Konfuzianismus und Puritanismus. in *GAzRS*. I., 大塚久雄・張漢裕（訳）「儒教とピューリタニズム」、『宗教社会学論選』、みすず書房、1972 年。
- Weber, M., Konfuzianismus und Taoismus. in *GAzRS*. I., 木全徳雄（訳）『儒教と道教』、創文社、1971 年。
- Weber, M., Religionssoziologie, in *Wirtschaft und Gesellschaft*. 5. rev. Auf., J. C. B. Mohr, 1972. 武藤・蘭田・蘭田（訳）『宗教社会学』、創文社、1976 年。
- Weber, M., Wissenschaft als Beruf. in *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*., J. C. B. Mohr, 1922.
- 尾高邦雄（訳）『職業としての学問』、岩波書店、1980 年。
- Weber, M., Zwischenbetrachtung: Theorie der Stufen und Richtungen religiöser Weltblehnung. in *GAzRS*. I., 大塚久雄・生松敬三（訳）「世界宗教の経済倫理 中間考察」、『宗教社会学論選』。
- （なお、訳語は適宜変更している。）

佛教大学社会学部論集 第 57 号 (2013 年 9 月)

(ちば よしお 現代社会学科)
2013 年 4 月 30 日受理